

# 安全保障を 考える

ここに掲載された意見等は、執筆者個人のもので、本会の統一的理解ではありません。

## 戦略という概念に関する一考察 ：ルトワックの「逆説的論理」を中心に

非会員 日本安全保障戦略研究所研究員

関根 大助

### はじめに—日本でのルトワック人気と戦略研究の必要性

近年、世界的に著名な戦略の専門家である米シンクタンク戦略国際問題研究所(CSIS)の上級顧問エドワード・ルトワック(Edward Luttwak)の著作がいくつか日本で翻訳出版され、売り上げは好調である。戦略という概念は、日本では安全保障分野において戦後にタブーのように扱われていたが<sup>1</sup>、一部の日本人の間では、彼の戦略論に強い関心を抱くほど危機感が高まっている。

このようなちょっとしたルトワックブームもあり、戦略という概念が今までよりも日本で注目されていると考えられる。一方で、この概念は扱いが難しく、それに対する人々の理解が浅いことは、安全保障の根幹にかかわる。また、ルトワックの主張のような海外の専門家の意見をただ受容するだけで、それを自分たちなりに昇華しないのであれば、日本の戦略研究(strategic studies)は一向に進歩しない。

こうした考えに基づき、本稿の目的は、現在の日本でのルトワック人気に乗じ、近年出版された彼の和訳本における主張、特に逆説的論理(paradoxical logic)を中心に引き上げ、それらをあらためて考察し、戦略という概念について理解を深めることである。

まず本稿では、議論の前提として戦略という概念の定義と次元について論じる。次に、ルトワックが主張する、戦略を複雑にする要因である逆説的論理と戦略の基本構造の概要について確認する。そして、同一の逆説的論理が常に支配的な影響を及ぼす訳ではな

<sup>1</sup> 本稿で論じる戦略は、「対抗勢力との争いが存在する領域での戦略」であり、この「戦略」は、明確な「敵の存在」を想定しない「経営戦略」のようなものとは異なる。

く、他の戦略を構成する要素がより大きな影響を与える例として、戦略文化（strategic culture）に焦点を当て、中国に対するフィリピンの外交政策を取り上げる。最後に、新たな状況に適応しなければならない戦略には不可欠である、アクターの行動の予測についての考え方を検討する。

## I 戦略の定義と次元

戦略という概念は抽象的で曖昧であり、それをイメージすることは決して容易ではなく、日本人に限らず、世界的にも広く理解されているとはいえない。戦略を理解することは、戦略を上手く実行することよりも難しいとまでいわれている<sup>2</sup>。数学的に計測することが比較的容易である「破壊」が、よく戦争の目的そのものとして混同されることがあるが、重要なのは、戦略の狙いは、数学的に分析することが難しい、対象をコントロールするという点である<sup>3</sup>。このことが戦略というものを理解しづらくしているといえる。

### 1 戦略の定義

戦略という概念には様々な定義が専門家間で主張されているが、未だに広く受け入れられているものがない。ルトワックも「戦略は、適切な定義を欠いたまま、多くの意味を持つ言葉である」<sup>4</sup>と述べている。ルトワックは彼の表的な著作である『エドワード・ルトワックの戦略論』の巻末付録「戦略の定義」において、いくつかの代表的な戦略の定義を紹介しているが、そのなかでフランスの将軍アンドレ・ボーフル（Andre Beaufre）の「紛争を解決するために力を用いる意志の対立に関するアート」という定義を「本書における私の目的と合致している」としている<sup>5</sup>。

本稿では、戦略という概念を考える上での参考として、「軍事的な戦略」と「大戦略」に分けて考え、それらの定義について以下のように考えることにする<sup>6</sup>。

**軍事的な戦略：**戦略という言葉は、人類の歴史上長い間にわたり、政治的ユニットによる軍事力の行使に関するものとして考えられてきた。プロイセン王国の将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツ（Carl von Clausewitz）は、その著作である『戦争論』で「戦

---

<sup>2</sup> Colin S. Gray, *War, Peace and International Relations: An Introduction to Strategic History*, Routledge, 2007, p. 13.

<sup>3</sup> たとえば、次の文献を参照：J.C. ワイリー著、『戦略論の原点：軍事戦略入門』奥山真司訳、芙蓉書房、2007年；コリン・グレイ『戦略の格言：戦略家のための40の議論』奥山真司訳、芙蓉書房、2009年、113頁。

<sup>4</sup> エドワード・ルトワック『エドワード・ルトワックの戦略論：戦争と平和の論理』武田康裕、塚本勝也訳、毎日新聞社、2014年、17頁。

<sup>5</sup> 同上、408頁

<sup>6</sup> 技術、戦術、作戦、戦域、大戦略という各戦略レベルの定義についてルトワックは、「・・・抽象的な語句からなる言語の網では、動的な戦略の本質ではなく、浅薄な形でしか捉え切れない。戦術やそれ以外のレベルの戦略について非常に多くの定義がすでに出回っている。しかし、どの定義一つとってみても、数多くの例外があることがたちまち明らかになる。戦略の下位分類（航空戦術、海軍作戦など）のそれぞれについてさらなる定義を作り出すことで例外を回避しようとするなら、最終的にはそれらの定義が何を意味するのかを思い出すだけでも事典を要するほどになってしまう。そうすることは戦略の本質を理解する上で実質的には役立たないのである」「定義を試みる場合は、空虚な言語の羅列ではなく、観察された事実を用いて表現する」と述べている。次の文献を参照：同上、143-144頁。

争は政治的手段とは異なる手段をもって継続される政治にほかならない<sup>7</sup>と述べ、それ以降この考え方は人々に強い影響を与えた。よって軍事に関する戦略全般は主に、政治に連なる目的を達成するために、軍事的手段を適切に用いるアートを指すところでは考える<sup>8</sup>。後述するルトワックの技術、戦術、作戦、戦域といった戦略レベルはここに当てはまる。

**大戦略:** また、20世紀を代表する英国の戦略思想家バジル・リデル＝ハート (Basil Liddell Hart) が、「大戦略」という概念を提唱し、それを「一国または一連の国家群のあらゆる資源を戦争の政治目的——基本政策によって明示された目標——の達成に向かって、調整し、志向すること」<sup>9</sup>とした。リデル＝ハートは大戦略を、広い視野で戦時だけでなく平時の状態を考慮した安全保障政策の一環として考えた。大戦略の解釈は専門家によって異なる場合が多く、その定義は様々なものがあるが、本稿では、軍事的な戦略よりも高位に位置する大戦略の定義を、政治的ユニットが、その安全保障に関する政治的な目的を達成するために、軍事資源をはじめとした必要なあらゆる資源を適切に用いるアートとする。

## 2 戦略の次元

英国の戦略研究の泰斗であるコリン・グレイ (Colin Gray) は、「戦略」の意味を、「政策の目的のための軍事力の行使および軍事力による脅しの行使」としているが<sup>10</sup>、彼はその軍事的な戦略に関係する次元 (dimension) を大きく三つに分け、一つ目の「人々と政治」には、「人々」「社会」「文化」「政治」「倫理道徳」、二つ目の「戦争準備」には、「経済と兵站」「組織」「軍事管理機関」「情報と諜報」「戦略理論とドクトリン」「テクノロジー」、三つ目の「戦争それ自体」には、「軍事活動」「指揮系統」「地理」「摩擦、偶然性、不確定要素」「敵という存在」「時間」が存在し、しかもそれぞれが相関関係にあると述べている<sup>11</sup>。

このような次元の中から、一つまたはそれ以上の面で弱さが露呈した場合、全体の戦略のパフォーマンスが著しく落ちる可能性がある。このように、戦略は多次元のものであり、軍事戦略においても戦略研究には技術、部隊編成、戦術だけでなく、政治学、経済学、心理学、社会学、地理学の知識が必要になるといわれている<sup>12</sup>。戦略研究は学際的な側面が大きな特徴であり、そして時代とともに戦争・戦略の規模が大きくなってより複雑性も増している。そして大戦略を考える際には、非軍事的な要素および資源の重要性をより強調し、さらに広い視野で考える必要がある。

そして何よりも、戦略を複雑にしているのが、グレイも挙げている「敵という存在」が発動させるルトワックの逆説的論理である。

---

<sup>7</sup> カール・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論 (上)』篠田英雄訳、岩波書店、1968年、14頁。

<sup>8</sup> たとえば、次の文献を参照：ベイジル・ヘンリー・リデル＝ハート『戦略論：間接的アプローチ 下巻』市川良一訳、原書房、2010年、257頁。

<sup>9</sup> 同上、258頁。

<sup>10</sup> Colin S. Gray, *Modern Strategy*, Oxford University Press, 1999, p. 17.

<sup>11</sup> *Ibid.*, pp. 23-44.

<sup>12</sup> ジョン・ベイリス、ジェームズ・ウィルツ「序章：今日の世界における戦略」ジョン・ベイリス、ジェームズ・ウィルツ、コリン・グレイ編『戦略論：現代世界の軍事と戦争』石津朋之監訳、勁草書房、2012年、8頁。

## II ルトワックの逆説的論理と戦略の基本構造

ここでは、『エドワード・ルトワックの戦略論』でルトワックが主張している逆説的論理および戦略の基本構造の概要を紹介する。

### 1 逆説的論理とは何か

ルトワックは、戦争や平和について、「科学で説明するには不規則すぎる」という考え方を前提にしている<sup>13</sup>。その不規則性を読み解くうえで鍵を握るのが、逆説的論理である。

この論理では、物事を直線的にシンプルに考える一般的な思考モデル「直線的論理」（線形論理：linear logic）とは異なり、対立する相手同士の間で起こる作用と反作用の相互作用によって物事の形勢が反対方向に転じる場合もあると考える<sup>14</sup>。戦争における一つ一つの行動はシンプルなものであるが、人間が行う戦略に関する行為は相互的であり、戦争では敵味方がお互いの行動に対して反対したり妨害しようとしたりする<sup>15</sup>。こういった敵対者同士の争いが戦略の「水平面」（後述）で行われ、戦略を逆説的なものにする。ルトワックは、この論理の発動について、「対立する意志の間で生じる動的な競争が逆説的論理の源泉である」と説明している<sup>16</sup>。彼は、国家間の平時の外交戦、競争、そしてあらゆる規模や形態の戦争、兵器とその対抗手段の間の最も細かい相互作用まで逆説的論理が当てはまるとしている<sup>17</sup>。

戦略は、日常生活の常識的論理ではなく、戦略自体の特別な論理によって支配されており、こうした紛争の逆説的論理においては、すべてが矛盾しているように見えるとルトワックは強調する<sup>18</sup>。彼は「平和を欲するならば、戦いに備えよ」という古代ローマの格言をその例として挙げているが、これは自分たちの戦力を蓄えることによって敵を抑止して自らを守る、または自分より弱い勢力を戦わないで説得したり屈服させたりすることができるという意味で、逆説的論理を象徴しているものと考えられる<sup>19</sup>。また、その過剰な破壊力ゆえに、攻撃に使用するよりも防御のための「抑止力」をもつ核兵器を、逆説的論理の分かりやすい例として挙げている<sup>20</sup>。他にも、味方陣営の有効な兵器には、敵勢力がその兵器に対抗しようとするため、まさにその有効性のために結果として効果を低下させる逆転現象が起きることがあるとしている<sup>21</sup>。自分たちが一手を繰り出せば、それに対して様々な反応が周囲から起きるため、その領域にはダイナミックな相互作用が存在することになる<sup>22</sup>。

敵対する相手のリアクションを前提として考える逆説的論理について、「そんなこと

---

<sup>13</sup> ルトワック『エドワード・ルトワックの戦略論』9頁。

<sup>14</sup> 同上、17頁。

<sup>15</sup> たとえば、次の文献を参照：クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』28-32頁；同上、19頁。

<sup>16</sup> ルトワック『エドワード・ルトワックの戦略論』140頁。

<sup>17</sup> 同上。

<sup>18</sup> 同上、3頁。

<sup>19</sup> 同上、16頁。

<sup>20</sup> 同上、16-17頁。

<sup>21</sup> 同上、3頁。

<sup>22</sup> エドワード・ルトワック『中国4.0』奥山真司訳、文藝春秋、2016年、49頁。

は当たり前だ」と指摘する人々がいるが、特に事態が切迫している場合、関係者の客観的な判断力が徐々に失われる。結果として、その「当たり前」のを見失うケースが実際に多く存在したため、人類の歴史において、多くの失敗や逆転が散見されることになる。自分たちと敵対勢力との力関係を冷静に見極めることを忘れて、単純な線形論理に基づいて行動すると手痛い反撃を受けることになる。

また、ルトワックは、敵が予想する可能性が最も低い逆説的な軍事行動を選択し敵の裏をかく、逆説的な戦略について説明している<sup>23</sup>。日常生活では通常選ばない困難を伴う行動が、敵が存在する戦略の世界では有効になるという逆説的論理である。この例としては、進行が困難な経路を選択することや夜襲などが挙げられている。しかし、敵の意表を衝くために敢えてリスクを冒したりコストを負ったりしても、その計算を誤って適切ではない手段や方法によって逆説的な戦略を実行したりする場合は、自分たち自身の首を絞めることになる<sup>24</sup>。

前述のような、多次元な戦争・戦略の性質である非線形性は、クラウゼヴィッツが提唱した「摩擦」<sup>25</sup>などを含む不確定性要素によって強まり、それらが相互に作用することによって不規則性がさらに高まる<sup>26</sup>。これらが主に戦略という概念の複雑性を形成している。

## 2 戦略の基本構造

ルトワックが考える「戦略」という概念の構造は、「水平面」と、下から技術、戦術、作戦、戦域、大戦略という五つのレベルによって形成される「垂直面」の二つの異なる面によって構成される。

まず「水平面」は、垂直面の各レベルに対応して構成される。五つの各レベルの水平面において、敵対者間で相手の動きに反対し逆行しようとする競争が起こる<sup>27</sup>。たとえば、各レベルの水平面で敵対者間の兵器、部隊、複数の部隊、統合軍、国家外交などによる作用と反作用の動的な論理が展開し、前述のような逆説的論理が生じる。

そして、「垂直面」であるが、これは五つの戦略レベルという明確な階層で分かれている。上下のそれぞれのレベルの間で相互作用があり、各レベルの争いの結果が単純に一方通行で伝わり結果が決まるわけではない<sup>28</sup>。仮に低い戦略レベルで成功を収めても、高いレベルでの失敗によって滅殺され、結果として意味を成さないかもしれない。たとえば、ある部隊の行動が成功しても、他の複数の味方の部隊が失敗した場合、より広い視野で考えればその成功は意味を成さなくなる。また、ルトワックは、第二次世界大戦

---

<sup>23</sup> ルトワック『エドワード・ルトワックの戦略論』19-24頁。

<sup>24</sup> 同上、21-32頁。

<sup>25</sup> 「摩擦」は、予測が不可能な偶発的な障害を指す。クラウゼヴィッツは摩擦について、現実の戦争と机上の戦争とを区別する概念としている。軍隊や安全保障に関する組織の運営において、失策、誤解、遅延、機械の故障といった不測の事態が起こるが、このような思いがけない摩擦は避けられない。そして、摩擦と摩擦は相互に作用して事態を悪化させる。次の文献を参照：クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』130-136頁；同上、26-32頁；「クラウゼヴィッツ『戦争論』を読む：第1章 戦争とは何か？？」日本クラウゼヴィッツ学会、<http://www.clausewitz-jp.com/kawamura001/kawa00102.html>。

<sup>26</sup> Ian Speller and Christopher Tuck, “Introduction,” David Jordan, et al., *Understanding Modern Warfare*, Cambridge University Press, 2008, p. 33.

<sup>27</sup> ルトワック『エドワード・ルトワックの戦略論』10頁。

<sup>28</sup> 同上、142-143頁。

が始まってしばらくは、ドイツと日本は戦術レベルや作戦レベルにおいて優位であったが、誤った同盟国を選択し、誤った敵国を作り出したために、最終的に敗北したとしている<sup>29</sup>。

ルトワックは、大戦略について、国際政治においては常に逆説的論理が作用しており、戦略の日常的な形態でもあると述べている<sup>30</sup>。平時における戦争準備と同様に、戦域レベルでの全般的な戦闘の遂行も、大戦略という最も高い戦略レベルに従属した形で展開される<sup>31</sup>。

垂直面の最上位である大戦略のレベルでは、外交活動、インテリジェンス、経済活動などの国家間の非軍事的関係の相互作用が加わり、技術、戦術、作戦、戦域戦略の総合的な成果が、国家間のすべてのやりとりの相互作用のなかに現れる<sup>32</sup>。ルトワックは、垂直面と水平面から成る戦略の構造を、戦略の垂直面において起こる各レベル間の軍事的相互作用の影響と、水平面での敵対関係で生じる相互作用の影響が最終的に大戦略レベルで収斂されるとする<sup>33</sup>。垂直面の各レベルの影響と、敵対関係によって形を成す水平面との合流点で戦争の結果は最終的に調整される。そして、各戦略レベルの成功や失敗は、大戦略という合流点においてまったく違った結果に変わるかもしれない。味方と敵対者との間で繰り広げられる戦略の領域での、二つの面における相互作用の影響の波及の仕方は様々である。

たとえば、味方が新しい有効な兵器を開発し、それによって各戦略レベルにおいても優位に立ち、そのまま戦争に勝利したとすると、下位の戦略レベルの成功がそのまま全体に波及したということになる。一方で、有効な兵器を開発し、当初は紛争において、軍事に関する戦略レベルにおいて味方は優位に進めていたものの、敵対者がその兵器に関する対抗手段を生み出したため、その兵器に依存していた味方の形勢が一挙に不利になる可能性もある。有効な兵器の開発とそれに対する依存が、結果としてマイナスに働いたことになる。しかし、味方が不利になったことにより、勢力均衡の崩壊を懸念した他国が不利な陣営に加わることによって、味方が優位に立つ可能性もある。また、ルトワックは例として、日本軍の真珠湾奇襲攻撃という成功は、結果的に米国という大国を完全に敵に回してしまったため、大戦略レベルの失敗につながったとしている<sup>34</sup>。軍事的な大きな成功の影響が大戦略レベルに波及し、自分たちにとって有利な立場での和平の締結につながる場合もあれば、相手の徹底抗戦を招く場合もあるだろう。

各戦略レベルの水平面における自分たちのアクションに対する他者のリアクションは様々である。そして、その水平面での相互作用の結果が、垂直面において他のレベルに直線的な影響を与えるとは限らない。なぜならば、ある戦略レベルの結果が、他の戦略レベルにおいて他者のどのようなリアクションを呼ぶかは不規則であるからだ。各戦略レベルでの失敗や成功は、結果として全体に好影響を与えることもあれば悪影響を与えることもあるため、不規則性や複雑性が戦略の特性として指摘されることになる。

---

<sup>29</sup> 同上、367-368頁。

<sup>30</sup> 同上、320頁。

<sup>31</sup> 同上、142頁。

<sup>32</sup> 同上、322頁。

<sup>33</sup> 同上。

<sup>34</sup> 同上、377-378頁；ルトワック『中国4.0』85-89頁。

この各垂直面と水平面からどのような事象が結果として大戦略へ影響をもたらすかを見極めることは難しい。そして、大戦略レベルでの水平面での成功が大きく結果を左右するといえる。

### III 中国をめぐる国際情勢と逆説的論理

最重要である大戦略レベルにおける逆説的論理の作用を強調しているのが、その著作である『自滅する中国』でのルトワックの主張である。それは強大になった国家が、それゆえに関係諸国の反発を生み出し、結果としてその弱体化を招くという国際関係の動きを指している。

#### 1 「勝利が招く敗北」

ルトワックの戦略論を理解する上でのキーワードの一つは「勝利が招く敗北」である。これは勝ち続けることが、最終的には自らを滅ぼすことになるという逆説的論理である。ルトワック曰く、戦略行動には、そこを超えると失敗するクラウゼヴィッツが提唱した「極限点」(culminating point)がある。いかなる勝利も、過剰拡大によって敗北につながることになる<sup>35</sup>。極限点は戦略レベルと戦術レベルのどちらにも存在する。

たとえば、彼は、ヒトラーの第三帝国を例に挙げ、ノルマンディーからスターリングラード、ラップランドからエジプトに急速に拡大し、過剰な拡大によって勝利が敗北に転じたと述べ、力の増強が自滅の原因を内包して滅亡に至ったことを主張している。そして、同様なことがローマ帝国の拡張と衰退の循環、ナポレオンの征服と崩壊にもいえるとしている<sup>36</sup>。

この論理に基づき、国際間においては、ある国家が「最強の大国」になると、その周辺国はその強大な国家に対する恐怖と敵意を刺激され、元々同盟を組んでいた国々を疑心暗鬼な中立国にしてしまい、そして中立国を敵国へと押しやってしまう可能性が出てくる<sup>37</sup>。つまり、国力で劣勢な弱小国たちは、この最強の大国のさらなる増強を抑えるためにまとまって対抗する。戦略の領域においては、勝者には常にその対抗勢力が生まれる可能性があるため、絶え間ない争いが続くこととなる。

#### 2 中国の台頭が発動させる逆説的論理

2013年に和訳版が出版された『自滅する中国』でルトワックは、その急速な成長を可能にした既存の国際システムを維持することは、中国にとって明らかに利益になるものであったため、中国の「平和的台頭」は、非常に信頼のおけるものであったと述べている。しかし、徐々に中国の行動は変化し始め、2008年の世界的な金融危機の勃発以降それは急激なものとなった。ルトワック曰く、中国の指導者たちは、「経済の総合力で中国の超大国への台頭が早まる」と認識し、尊大な言動を始めるようになったのだ<sup>38</sup>。

---

<sup>35</sup> エドワード・ルトワック『戦争にチャンスを与えよ』奥山真司訳、文藝春秋、2017年、125頁。

<sup>36</sup> 同上、129頁。

<sup>37</sup> 同上、130頁。

<sup>38</sup> エドワード・ルトワック『自滅する中国：なぜ世界帝国になれないのか』奥山真司監訳、芙蓉書房、2013年、2頁。

近年、中国は、「自己抑制を怠るといふ新興大国の典型的な過ち」を繰り返したため、経済、軍事、政治などの分野における現在の中国の台頭は、すでに他国が我慢できるレベルを超えて、戦略の領域における逆説的論理を作動させてしまったとルトワックは強調している。つまり、台頭する国家は、そのパワーの上昇により、パワーを失うという逆説的論理である。彼によれば、「戦略の論理に従えば、急速な経済成長、極めて迅速な軍備拡張、それに見合うだけの国際的な影響力の増大を同時に発展させることは不可能」であるということだ<sup>39</sup>。

ルトワックは、中国はこのような状況からでも台頭することができるかもしれないとして、二つの方法を挙げている。一つ目は、莫大なコストをかけてその国力を増大させる方法である<sup>40</sup>。つまり、その国力が、周辺国が服従を受け入れざるを得ない「抵抗の臨界点」を超えるレベルに達しなくては、周辺国は反発することになる<sup>41</sup>。

そして二つ目が、関係国を分断・孤立させながら、他国には十分に安心させるような措置を行うことである<sup>42</sup>。ところが中国は、日本、フィリピン、ベトナム、インド、インドネシアおよびマレーシアに対してこれとは正反対なことを行っているとルトワックは述べている<sup>43</sup>。その結果、逆説的な論理が発動し、大小の国家を反中国同盟という形で団結させるようになったというのだ<sup>44</sup>。これにより、大戦略のレベルでは徐々に中国が不利になることを彼は強調している。

### 3 ルトワックが修正した反中国同盟

こうした戦略の領域における逆説的論理の発動が、中国と周辺諸国の領土戦争をはじめとした争いを開始または再開させることになった。その結果として、アジア太平洋地域とグローバルなレベルでの米国のリーダーシップを強化したとルトワックは主張している<sup>45</sup>。とりわけ彼は、日本、ベトナム、そしてフィリピンを米国側へと近づけたと強調していた（周辺国の中でも、中国に対して恐怖をもち、中国文化に敬意をもち、そして中国市場を重視している韓国を例外としてルトワックは挙げている<sup>46</sup>）。

しかし、ここで注目したいのはフィリピンに対する見解である。ルトワックは、フィリピンの行動について、2013年に出版された『自滅する中国』における見解を、2017年の彼の著作『戦争にチャンスを与えよ』では完全に覆した。『自滅する中国』でルトワックは、フィリピンでは国民の63%が中国の台頭について否定的であるという調査結果が出ており、南シナ海における領土問題が発生して以降で最も親米的であると述べ<sup>47</sup>、中国の行動は、中国の友好国となり得る国を米国の下へと走らせたとしている<sup>48</sup>。そして、2016年3月に出版された『中国4.0』においても、ルトワックは、フィリピン

---

<sup>39</sup> 同上、137頁。

<sup>40</sup> 同上、5-6頁。

<sup>41</sup> 同上、329頁。

<sup>42</sup> 同上。

<sup>43</sup> 同上、5-6頁。

<sup>44</sup> 同上、312頁。

<sup>45</sup> ルトワック『中国4.0』6頁。

<sup>46</sup> ルトワック『自滅する中国』223頁。

<sup>47</sup> 同上、83頁。

<sup>48</sup> 同上、271頁。



のエリート層が中国系であることと反米感情をもっている一方で、中国の南シナ海の進出によって、フィリピンは米国に帰ってくるように頼みこむようになったとし、逆説的論理の影響を強調している<sup>49</sup>。

ところが、2017年4月に出版された『戦争にチャンスを与えよ』では、反中国同盟は、日本、インド、ベトナム、オーストラリアおよび米国によって構成されるとルトワックは述べている。ここで彼は、インドネシアとマレーシアにはあまり期待しておらず、そして大問題はフィリピンであるとしている<sup>50</sup>。フィリピンは米中の中で揺れ動いており、それには二つの要因が国内に存在していると述べている。第一に、フィリピンが米国の植民地であったため、米国の帝国主義、そして米軍基地に対する反感が蓄積していること、そして第二に、フィリピンの裕福な支配層やエリート層が中国系で中国との関係が深く、フィリピンという国に対して忠誠心が低いことを挙げている。大衆には反米感情が高まっており、エリート層は潜在的に親中であり、そしてスペイン系のエリート層は親中ではないとしている。そのため、ベトナムと比較すると「政治的なまとまり」がなく、フィリピン人は島を中国に奪取されても、ベトナム人のように戦うことができないとしている<sup>51</sup>。そして、フィリピン人に「戦闘する意志」を植え付けることは極めて困難であり、この国を「信頼できる同盟国」にすることは非常に難しいとしている<sup>52</sup>。

中国が戦略の論理を発動させたため、周辺国・関係国の内的バランス（支配的な国家に対して効果的に反抗するために自国の力を使ってバランスをとる）と外的バランス（他国と力を合わせてバランスをとる）<sup>53</sup>を促し、そして、民主主義国家では親中派のリーダーが選ばれなくなったとルトワックは『中国4.0』で述べている<sup>54</sup>。しかし、『戦争にチャンスを与えよ』では、2016年6月に誕生したフィリピンのロドリゴ・ドゥテルテ新大統領が、彼の国内政策に対する米国の批判をかわすために中国への接近を始め、このことはフィリピンが反中国同盟からすでに脱落したことを意味すると述べている<sup>55</sup>。

フィリピンの動向についてルトワックは、結果として、彼が述べた逆説的論理よりも、国内要因からその行動を分析したのである。そしてここで注目すべきは、戦略文化のような考え方である。

#### IV アクターの行動の予測に対する考え方

確かに逆説的論理は、明らかな対抗勢力が存在し、作用と反作用が起こる戦略の領域を考える上で、常に考慮しなくてはならない要素であるが、他にも考慮する必要のある要素は存在する。ここでは、ルトワックも重要視している戦略文化を中心に取り上げ、ルトワックにとっても困難な、アクターの行動の予測と戦略に関する理論の関係について

---

<sup>49</sup> ルトワック『中国4.0』59頁。

<sup>50</sup> 同上、50頁。

<sup>51</sup> ルトワック『戦争にチャンスを与えよ』97-99頁。

<sup>52</sup> 同上、103頁。

<sup>53</sup> 内的バランスと外的バランスについては、次の文献を参照：スティーヴン・M・ウォルト『米国世界戦略の核心：世界は「アメリカン・パワー」を制御できるか？』奥山真司訳、五月書房、2008年、172-200頁。

<sup>54</sup> ルトワック『中国4.0』47頁。

<sup>55</sup> ルトワック『戦争にチャンスを与えよ』103頁。

て考察する。

## 1 逆説的論理と戦略文化

米国の軍事戦略家バーナード・ブロディ (Bernard Brodie) は、「良い戦略は、良い文化人類学と社会学を前提としている。これまでで最悪の軍事的失敗のいくつかは、この分野における未熟な判断に由来する」と述べている<sup>56</sup>。ルトワックが近年日本で出版した『自滅する中国』『中国 4.0』『戦争にチャンスを与えよ』では、戦略の領域における逆説的論理や中国をめぐる国際情勢とともに、戦略文化という概念も大きく取り上げられている。

ルトワックは、国家の性質というものは二つの要素によって構成されており、第一は、人口、経済規模、テクノロジー、軍事力、兵器などの物質的に計測可能な要素であり、そして第二に、その国の精神や文化を物質的に計測不可能な要素として、「戦略文化」と名付けておきたいとしている<sup>57</sup>。戦史や戦略史について豊富な知識をもつルトワックであるが、戦略文化の専門家という訳ではなく、この概念そのものに対する説明を詳しく行っていない。

戦略文化の定義について特に広く受け入れられているものはないが、一例として挙げれば、国家や政治に関する集団内に存在する「地政学的な環境、歴史および政治文化のような基本的な影響に起因する、特徴的で持続的な一連の脅威および武力行使に関する考え、価値観および傾向」<sup>58</sup>といったものがある。戦略文化の源泉となり得るものの例としては、「物理的」なもの（地理、気候、天然資源、世代交代、科学技術）、「政治的」なもの（歴史的経験、政治制度、エリートの信条、軍事組織）、そして、「社会・文化的」なもの（神話と象徴、行為者たちが適切な戦略上の行動をとるうえで鍵となるテキスト）といったものが挙げられている<sup>59</sup>。

これらを考慮してフィリピンの振る舞いを分析すると、ルトワックが強調した強者に対する反発としての逆説的論理よりも、戦略文化の源泉である、歴史的経験やドゥテルテ大統領をはじめとしたエリートの信条の影響が表に出てきたと現状では考えられる。

筆者は、ルトワックが主張する通り、韓国が中国に抗うことは、歴史的・文化的背景、つまりその戦略文化のために難しいと考えていたが、『自滅する中国』においては、逆説的論理による関係諸国の中国に対する反発を、彼が強調し過ぎているように感じたため（そもそもこの本の原題は『中国の台頭 vs. 戦略の論理』(The Rise of China vs. The Logic of Strategy)である)、『自滅する中国』の巻末の解説において以下のように書いた。

・・・実際に中国にたいして、どの国がどのように対抗して行こうとするのかは不透明だ。国際関係に関する普遍的で大局的な理論や論理は存在するのかもしれないが、各国がそれぞれの「伝統的な戦略文化」と、変化する可能性のある「現今の戦略文化」を持っており、さらに国際情勢は刻一刻と変化し続けているのだ。

<sup>56</sup> Bernard Brodie, *War and Politics*, Cassell, 1973, p. 332.

<sup>57</sup> ルトワック『中国 4.0』157頁。

<sup>58</sup> Allan Macmillan, Ken Booth, and Russel Trood, "Strategic Culture," *Strategic Culture in the Asia-Pacific Region*, Ken Booth and Russell Trood, eds., Macmillan, 1999, p. 8.

<sup>59</sup> ジェフリー・ランティス、ダリル・ハウレット「戦略文化」ベイリス、ウィルツ、グレイ編『戦略論』130-135頁。

こういった国際政治におけるダイナミックな要素が、今後も具体的にどのような形で国家の行動に反映されるかを正確に予測することは容易ではなく、各国各組織は臨機応変に対応できる体制を整える必要があるだろう<sup>60</sup>。

ルトワックは、『戦略』は、完全に『逆説的論理』によって動かされている<sup>61</sup>。「パラドキシカル・ロジックは、この地球上で、重力の次に強い力を持っている。だからこそ、現在のような世界の状況が生まれているのである」<sup>62</sup>と逆説的論理の影響の強さを殊更に強調しているが、それだけを単純に当てはめようとした場合、すべてのアクターの行動・振る舞いを説明、ましてや予測することは困難である。

ただでさえ、敵対者の間に起こる相互作用は、定量化や予測の難しい非線形的な結果を生み、人々を翻弄することになる。その上、立場も文化も理も異なる相手が、どのようなリアクションを起こすかを予測することは極めて難しい。

## 2 戦略文化の考え方

戦略文化は、国際政治におけるアクターの行動の分析や予測に用いられるが、この概念も前述のような多様な源泉によって形成され、しかもそれ自体が変化するため、単純な思考で読み解ける概念ではない。たとえば、中国の戦略文化を描写することが難しい理由として、①文化は変化し、変化の要因は様々である、②歴史は、戦略文化の主な源泉であるが、異なる歴史期間毎の影響は多様である、③決定的な影響力をもつ、政治的および軍事的組織の重要な地位を占める、または国際的な危機や戦争を管理する人間、つまり「戦略文化的な人物」(strategic cultural person)を特定することは容易ではない、④儒教と法家という正反対の政治的イデオロギーの研究、といったことが専門家によって挙げられている<sup>63</sup>。これと類似した問題が他の国々にも存在するだろう。

戦略文化の研究によってアクターの行動を考える際、その前提として、たとえば、「伝統的な戦略文化」「現代の戦略文化」「現今の戦略的傾向」のように整理して考えるべきだろう<sup>64</sup>。これらが、変化したり、互いにせめぎ合ったり、混ざり合ったりしながら実際の行動に反映されていく。

中国の場合は、中華思想的な世界観や、孫子の『兵法』のような欺騙をはじめとした無制限の手段と方法を重視する古典的な兵法書由来の考え方が、伝統的な戦略文化を形成しているといえるだろう。また、毛沢東の戦略思想の影響とその変化や、シーパワーを重要視するようになったことなどは、その現代の戦略文化を形作っていると考えられる。そして、『中国 4.0』でルトワックは、中国は、2000年代に入り「平和的台頭」(中国 1.0)を採用していたが<sup>65</sup>、世界金融危機以降に「対外強硬」(中国 2.0)に移行し<sup>66</sup>、2014年秋に中国 2.0の間違いに気づいたため、抵抗の無いところには攻撃的に出て抵抗

<sup>60</sup> 関根大助「解説：ルトワックの戦略の論理と中国の戦略文化」ルトワック『自滅する中国』361頁。

<sup>61</sup> ルトワック『戦争にチャンスを与えよ』107頁。

<sup>62</sup> 同上、126頁。

<sup>63</sup> Shu Guang Zhang, “China: Traditional and Revolutionary Heritage,” Booth and Trood eds., *Strategic Culture in the Asia-Pacific Region*, p.29.

<sup>64</sup> 海外の専門家の間では、たとえば、“traditional strategic culture” “modern strategic culture” “contemporary strategic culture” “contemporary strategic policy” といった用語が使用されている。

<sup>65</sup> ルトワック『中国 4.0』18-24頁。

<sup>66</sup> 同上、26-55頁。

があれば止める「選択的攻撃」(中国 3.0)を開始したと述べている<sup>67</sup>。こうした時折々の戦略的傾向の忙しない変化の間にも、中国特有の伝統的な戦略文化や現代の戦略文化の影響は、彼らの振る舞いの中に様々な形で現れる。

最終的には、アクターが、その個性的な戦略文化を強く反映した行動を取る可能性もあれば、他国から見ても極めて常識的と考えられる行動を取る可能性もある<sup>68</sup>。多様な戦略文化的な要素がどのように行動に影響を及ぼすかを見極めることは容易ではない。実際に人間や組織の行動は多様な要素に影響を受けるため、戦略文化による分析の目標は高望みしない方が賢明である。アクターによる戦略行動の完璧な予測は不可能であるため、この概念は、現状の分析、より深い理解の助け、自分たちの将来の行動の不確実性の低下といったことをその狙いとしたツールとして扱うのが無難である<sup>69</sup>。このような考え方は、他の戦略行動の分析方法にもいえるのではないだろうか。

ドゥテルテ大統領はフィリピンの戦略文化を反映する人物であるが、彼の対中政策の背景には、親米反中のフィリピンを良しとしない勢力による反作用も影響しているだろう。ルトワックのいうように、逆説的論理は戦略のあらゆるところに様々な形で影響を及ぼし、戦略文化のような他の行動要因との関連性も考えられる。これらは平行して何かしら戦略行動に作用しているのだ<sup>70</sup>。

ルトワックは、フィリピンが反中国同盟から脱落したと述べたが、今後も完全にそのまま彼らが反中国同盟に加わることがないのか否かは断言できない。他国はもちろん、自国であろうとも、戦略文化や逆説的論理の作用を正確に読み解き、それに基づいてすべての行動を正確に予測することは不可能だろう。

### 3 包括的な戦略思考の必要性

中国とその周辺国の歴史や文化的な傾向がヨーロッパと異なることを認識し<sup>71</sup>、戦略文化を重視し、戦略環境が常に変化することを強調するルトワックにとっては、ドゥテルテ大統領のような指導者の登場とフィリピンの外交政策の変化は、特段驚くべきことでは無かったであろう。ただ、強調しておきたいのは、同一の逆説的論理が常に他の要素を上回って実際の行動に現れるとは考えるべきではないということだ。このようなことは、逆説的論理に限った話ではなく、他の行動要因も同様である

たとえば、近年国内外で地政学ブームともいえるべき傾向がみられ、地政学という言葉やそれに関連する専門用語が識者の間で多く使用されるようになったが、地理環境がすべての人間や国家の行動を決めるわけではない。シーパワーを提唱した米海軍大佐(退

---

<sup>67</sup> 同上、58-81 頁。

<sup>68</sup> アクターが他の多くのアクターから見て常識的と思なされる行動を取ることも、そのアクターの文化が影響した結果である。なぜなら、戦略行動は文化を超えることができないからである。次の文献を参照：Gray, *Modern Strategy*, pp. 129-151.

<sup>69</sup> *Ibid.*, p. 136; Alastair Iain Johnston, "Thinking about Strategic Culture," *International Security*, Vol. 19, No. 4, 1995, p. 64.

<sup>70</sup> 前出のグレイは、「戦略文化という概念は、逆説的論理の考え方と同様に、概して詳細は捉えどころがないが、戦略の性質と実践に関する重要な浸透性を示している。それが特定の策定者および実行者の文化が反映する戦略の性質を帯びているように、逆説的論理が作用する戦略の性質を帯びている」と述べている。次の文献を参照：Gray, *Modern Strategy*, p. 136

<sup>71</sup> ルトワック『自滅する中国』6 頁。

役後に少将) アルフレッド・マハン (Alfred Mahan) や「現代地政学の祖」と呼ばれる英国の地理学者ハルフォード・マッキンダー (Halford Mackinder) は英米系地政学の基礎を築いたが、彼らは国家の行動にはその国の歴史や文化によって形成された政治家や国民の志向が大きく影響することを述べている<sup>72</sup>。地理環境の影響は大きい、それだけですべての国家の行動を説明することは不可能である。

また、現在の中国が地域覇権を求めると否かについて議論される際、頻りに米国の国際政治学者であるシカゴ大学特別功労教授ジョン・ミアシャイマー (John Mearsheimer) の名前が上がる。なぜなら、彼は、国家はパワーの最大化を目指し、覇権の達成が最終的な目標となると考える理論であるオフensive・リアリズム (offensive realism) を提唱しているからだ<sup>73</sup>。ミアシャイマーは、国際関係の分析アプローチとして、その無政府状態とパワーの分布によって定義される国際システムの構造から国家行動を説明する構造的リアリズム (structural realism : ネオリアリズム (neorealism))<sup>74</sup>を用いる学者である。しかし、この構造的リアリズムのみで国家の行動のすべてを説明できない<sup>75</sup>。なぜならば、国家の外交政策ではなく国際政治の理論である構造理論は、外的な力が国家行動をいかに決定するかを説明するが、国家内部の力の影響については言及しないからである<sup>76</sup>。

戦略文化、地理環境論 (地理環境は戦略文化を形成する重要な要素だが)、構造的リアリズム、そして逆説的論理などのアクターの行動の分析方法は、戦略を考える上で参考にすべきである。しかし戦略研究においては、あくまで、実践的な戦略を策定するための、包括的、多面的、複合的な思考のための多様な要素や判断基準の一つとして考えるべきである。

一方で、前出のグレイは「予測には極度の用心が必要であるという豊富な証拠があるにもかかわらず、政治家や当局者は水晶球を覗き込む誘惑に抵抗できない」<sup>77</sup>と述べている。つまり、人々は将来の予測という解答を得るために手軽な公式を求める傾向にあるのだ。確かに、単純化された理論がなければ、自分たちの周辺の複雑な世界を理解することはできないが、理論においては、特定の要素を強調する一方で、他の要素を切り捨てて世界の動きを単純化するため、現実ではその理論には当てはまらない例外が起こり得る<sup>78</sup>。重要なことは、すでに起こった事象や現在起こっている事象の分析ならばともかく、事前に知ることが不可能な、過去の事例にはない常に真新しい戦略環境が現れる将来の予測についての分析は、極めて慎重に行われるべきであるということだ。

---

<sup>72</sup> A.T. Mahan, *The Influence of Sea Power upon History 1660-1783*, Dover edition, Dover Publications, 1987 (originally published by Little Brown in 1890), pp. 50-80; H. J. Mackinder, "The Physical Basis of Political Geography," *Scottish Geographical Magazine*, Vol. 6, Issue 2, Feb1890, p. 84.

<sup>73</sup> ジョン・ミアシャイマー『大国政治の悲劇：米中は必ず衝突する！』奥山真司訳、改訂版、五月書房、2014年、54-57頁。

<sup>74</sup> たとえば、次の文献を参照：野口和彦「リアリズム」吉川直人、野口和彦編『国際関係理論』勁草書房、2006年、141-143頁。

<sup>75</sup> たとえば、次の文献を参照：Paul Schroeder, "Historical Reality vs. Neo-Realist Theory," *International Security*, Vol. 19, Issue 1, Summer1994, pp. 108-148 ; ミアシャイマー『大国政治の悲劇』36-41頁。

<sup>76</sup> ケネス・ウォルツ「日本語版への序文」ケネス・ウォルツ『国際政治の理論』河野勝、岡垣知子訳、勁草書房、p. iv。

<sup>77</sup> Colin S. Gray, *The Future of Strategy*, Polity, 2015, p. 71.

<sup>78</sup> ミアシャイマー『大国政治の悲劇』36-41頁。

過去の歴史から学ぶこと、過去の事例から抽出された理論を参考にすることは重要である、なぜなら時代を超越した普遍的な本質は存在するからである<sup>79</sup>。戦略思想に関していえば、たとえば、古代のアテネ人トゥキュディデス（Thucydides）がその著作である『歴史』で述べたように、戦争を行う人間の行動原理は古代から、「恐怖」「名誉」「利益」が主な理由であると考えられる<sup>80</sup>。そして、孫子の『兵法』が重要視する戦略的柔軟性および知識や情報を重視する姿勢<sup>81</sup>、クラウゼヴィッツが『戦争論』で論じた戦争・戦略の本質や戦争と政治との関係<sup>82</sup>、英国の戦略思想家であるジュリアン・コルベット（Julian Corbett）が主張した、人類が生活する陸上が戦略空間として最も重要であるという主張と、それを前提とした戦争と戦略における地理的な戦略空間の相互作用や補完関係に関する考え方は<sup>83</sup>、時代の変化に囚われない普遍性をもつ戦略思想だと考えられる。

そして、ルトワックの「戦略の領域における敵対者間の作用と反作用が発動させる逆説的論理」の考え方も、将来において普遍性もつ古典的な戦略思想として扱われる可能性がある。ルトワックが逆説的論理を提唱した『エドワード・ルトワックの戦略論』の原著の初版が出版されたのは1987年であるが、戦略思想は先人たちのアイデアに基づいて発展させる場合が多く、ルトワックもクラウゼヴィッツの主張を多く参考にしている。実際に、彼の逆説的論理と似ている、彼我の間で起こる相互作用の扱いの難しさという考え方がクラウゼヴィッツの『戦争論』の中で示されている<sup>84</sup>。ルトワックの逆説的論理に関する細部までわたる主張に普遍性があるかどうかは現時点では不明だが、逆説的論理の基本となる考え方は、歴史の審判をある程度受けたアイデアといえるのではないだろうか。

一方で、テクノロジーや文化、人々の価値観や感情などは時代や状況毎に変化し、国内外の情勢は刻一刻と変化するため、過去の歴史と完全に一致する未来は起こらない。プロイセン王国の参謀総長だった大モルトケ（ヘルムート・フォン・モルトケ：Helmut von Moltke the Elder）は、歴史研究から戦略は多くの利益を得ることができるかと考えると同時に、戦略とは、不断の変化に適応して進歩することとし、臨機応変の体系であるとしている<sup>85</sup>。

人によってはその立場や仕事の性質上、わかりやすい明快な主張が求められることも

---

<sup>79</sup> たとえば、次の文献を参照：グレイ『戦略の格言』285-288頁。

<sup>80</sup> たとえば、次の文献を参照：トゥキュディデス著、『歴史（上）』小西晴雄訳、筑摩書房、2013年、69頁。

<sup>81</sup> たとえば、次の文献を参照：杉之尾宜生編著『戦略論体系1：孫子』芙蓉書房、2001年。

<sup>82</sup> たとえば、次の文献を参照：クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』。

<sup>83</sup> たとえば、次の文献を参照：Sir Julian S. Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, Introduction by Eric Grove, Naval Institute Press, 1989 (first published in 1911); Gray, *Modern Strategy*, pp. 125-126; 関根大助「コーベットを知らずして海洋戦略思想を語るなかれ：マハンと異なるその戦略思想の特徴」『波涛』第39巻第2号、2013年7月、31-40頁。

<sup>84</sup> クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』169頁。

<sup>85</sup> ただしモルトケは、戦略における一般原理原則の存在を否定している。たとえば、次の文献を参照：Field Marshall Helmuth Graf von Moltke, *Moltke on the Art of War: Selected Writings*, Daniel J. Hughes, ed., Presidio Press, 1995, p. 47; 片岡徹也「モルトケ」前原徹監修、片岡徹也編集『戦略思想家事典』芙蓉書房、2003年、179-180頁; ハーヨ・ホルボーン「プロイセン流ドイツ兵学 モルトケ シュリーフェン」エドワード・ミード・アール編著『新戦略の創始者：マキャベリからヒトラーまで（上）』山田積昭、石塚栄、伊藤博邦訳、原書房、2011年、240-241頁。

あるかもしれないが、多様な行動要因や、普遍性と有為転変な性質が織り成す現実世界の複雑性に実践的に対応する必要がある戦略において、行き過ぎた思考の単純化には危うさが伴う。したがって、最終的には多様な見解と情報を適切に取捨選択または統合し、あくまで慎重に総合的・包括的に判断しなくてはならない。

### おわりに—前向きな諦観と柔軟性

戦争と平和、そしてそれに関係する戦略には多様な要素が複雑に作用しているが、特にその特色を強めているのが逆説的な論理であり、これを無視した戦略思考は大きな過ちを犯すことになるだろう。しかしこれまで述べたように、逆説的論理のような戦略に関する概念や理論を単独で用いて将来を予測することは困難である。

適切な戦略の策定のための思考過程においては、安易な近道は存在しないため、広い視野と豊富な知識から包括的かつ慎重に判断を下す必要がある。そして、その複雑性を認識し理解しつつ、それを受け入れた上で目的のために取り組むという、前向きな諦観が戦略に携わる者には求められる。そして戦略は、偶然性、不確実性、曖昧性といった複雑性が支配する領域において、「状況や環境に適応させる恒常的なプロセス」<sup>86</sup>であるため、実際の問題として「柔軟性」が求められる。

日本の安全保障の現状を考えると、近年中国の海洋進出や北朝鮮の核・ミサイル開発が国際社会の緊張を高める一方で、日本では大半の国民の危機意識が低いままである。周辺国が軍備増強を急激に進めているにもかかわらず、日本政府は防衛予算を増やすこともままならず、安全保障に関する法制の改正・制定については反対派が激しく抵抗する。物的資源および人的資源が不足し、制約の多い法制に縛られた防衛体制が、日本に柔軟性のある戦略をもたらすことは不可能である。

このような硬直しきった、暗澹とした状況を改善するためには一刻の猶予も許されないうが、そのためにも、この戦略という基本的な概念をあらためて考える必要があるのではないだろうか。

---

<sup>86</sup> ウィリアムソン・マーレー、マーク・グリムズリー「はじめに：戦略について」源田孝訳、ウィリアムソン・マーレー、マクレガー・ノックス、アルヴィン・バーンスタイン編著『戦略の形成：支配者、国家、戦争（上）』石津朋之、永末聡監訳、歴史と戦争研究会訳、中央公論新社、2007年、11頁。

[ 筆 者 紹 介 ]



関根 大助（せきね だいすけ）

日本安全保障戦略研究所研究員。元海洋政策研究財団研究員、元日本戦略研究フォーラム特別研究員。豪州ウーロンゴン大学豪州国立海洋資源・安全保障センター（ANCORS）で PhD in Maritime Policy を取得。共著：『中国の野望をくじく日本と台湾』（内外出版、2014 年）。論文所収書籍：「ルトワック『戦略』（一九八七年）：戦争の意義とは何か」『戦略論の名著』（中央公論新社、2013 年）；「附論：ユーラシアの地政学的環境と日本の安全保障」『中国の海洋侵出を抑え込む－日本の対中防衛戦略』（国書刊行会、2017 年）。共訳：『現代の軍事戦略入門』（芙蓉書房、2015 年）。